

Nagasaki Association for Hibakushas' Medical Care

NASHIM

ヒバクシャ医療国際協力通信



Vol. 15
2004
AUTUMN



チェルノブイリ原子力発電所を視察
(後方の建物が事故を起こした4号炉)



ウクライナのグリシチェンコ外務大臣を表敬訪問

- | | |
|-------------------|---------------------------------|
| Report | ウクライナをナシム会長・副会長が訪問 |
| Report | チェルノブイリ・カザフスタン関連医師研修 |
| People | 研修後の感想 |
| From Korea | 韓国医師等と被爆者医療で交流 |
| 公開セミナー | 放射線災害の緊急医療について考えよう |
| Information | ウクライナのグリシチェンコ外務大臣が長崎を訪問
図書出版 |

Report

ウクライナをナシム会長・副会長が訪問

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会（略称NASHIM ナシム）は、毎年、旧ソ連時代に数多くの核実験が行われたカザフスタン共和国やチェルノブイリ原発事故周辺国へ専門家を派遣し、現地医療機関や研究所で放射線被ばく者の医療などに従事する医師や研究者たちと情報交換を行ったり、医療技術の指導や長崎でこれまで受け入れた被爆者医療研修生のフォローアップなどを行ってきました。

今年はナシムから井石哲哉会長（長崎県医師会会長）と齋藤寛副会長（長崎大学長）、事務局の草場里見書記（長崎県）と松田久美子書記（長崎市）が8月25日～30日の6日間ウクライナを訪問しました。また、長崎大学から高村昇助教授、イリヤ・シデロフ大学院生にも同行していただきました。



内分泌代謝研究所を訪問

ウクライナ

ウクライナは国土面積が60万3,700km²で日本の約1.6倍、人口は4,800万人です。首都はキエフで、主要産業は農業、鉄鋼業、造船業です。第二次世界大戦末期、ソ連の対日参戦問題などについて3カ国の首脳が会談したところとして知られるヤルタや、19世紀半ば、看護師ナイチンゲールがロシアとトルコ・英仏との戦争で敵味方の区別なく負傷者を看護した地 クリミア半島はこのウクライナにあります。

ウクライナ人は現在長崎県内に30名住んでおり（H15.12末現在）、うち3名は長崎大学に留学中です。

なお、ウクライナは、1991年の独立時には世界第3位の核保有国でしたが、1996年には旧ソ連から引き継いだ核兵器すべてを撤去し、現在非核保有国になっています。

ウクライナ外務大臣を表敬訪問

今年6月、ウクライナのコスチャンティン・グリシチェンコ外務大臣が来日し、川口外務大臣との会談に先立ち長崎県を訪問して金子知事や伊藤長崎市長と会談したほか、ナシムの井石会長、齋藤副会長等ナシム関係者とも懇談を行いました。今回のウクライナ訪問では、訪問団が在ウクライナ日本大使館のご協力を得て、キエフのウクライナ外務省にグリシチェンコ外務大臣を表敬訪問することができました。



放射線医学研究所

会談では、グリシチェンコ外務大臣が「ウクライナはチェルノブイリ原発事故の悲惨な経験を有する国民として、長崎市民が数十年前の悲惨な出来事を生き抜いたことを良く理解するとともに深く同情している。ウクライナ政府はチェルノブイリ原発事故の被災者の保護を国家の優先戦略としており、この点からナシムがウクライナの関係機関へ協力している姿勢を高く評価している。」と述べられました。井石会長は長崎とウクライナの関係機関との協力関係がますます密接になるよう、大臣に側面からの支援を要請しました。

在ウクライナ日本大使を表敬訪問

また訪問団は、今回のウクライナ訪問にあたって現地で関係機関と日程調整等の協力をいただいた在ウク

ライナ日本国大使館を表敬訪問し、天江大使をはじめとするスタッフの方々にお礼を述べました。席上、天江大使はウクライナ国内の医療機関の現状を説明するとともに、チェルノブイリの悲劇が風化しないよう今後とも協力が必要であると述べるとともに、ナシムや長崎大学医学部のこれまでの活動にお礼を述べられました。

また、訪問最終日には、日本大使館会議室で現地のマスコミ関係者を集めて記者会見を行い、熱心な質疑が行われました。

関係機関訪問

期間中、訪問団はナシムが毎年夏に実施している被爆者医療研修に職員を派遣している内分泌代謝研究所と放射線医学研究所を訪れました。内分泌代謝研究所ではトロンコ所長からチェルノブイリ原発事故発生後現在までの研究所の活動内容についての説明がありました。また、放射線医学研究所ではベベシュコ所長をはじめとする研究所のメンバーから暖かい歓迎を受けた後、意見交換を行うとともに、研究所内を視察しました。併設されている病院にはチェルノブイリ原子力発電所爆発事故の消火活動を行って被ばくした元消防士が入院しており、事故後18年経ってもなお被ばくの後遺症で苦しんでいるのを見て、放射線事故の悲惨さをあらためて実感しました。

さらに訪問団は、キエフ市内のチェルノブイリ被災者のための健診センターを総合管理しているキエフ市保健局を訪問し、被災者の健康管理の現状について説明を受けました。



古都キエフ市内には美しい
キリスト教教会が多い

チェルノブイリ原子力発電所視察

チェルノブイリ原子力発電所は、首都キエフから北に車で約2時間半のところにあります。広大な敷地に発電所が立ち並んでいましたが、発電所のすべての炉は2000年末に稼働停止しました。事故を起こした4号炉はコンクリートの石棺で覆われていますが、老朽化のために放射能漏れが懸念されており、現在さらに新たなドーム型石棺の建設を予定しているとのことでした。4号炉のすぐそばにある資料展示室では、職員から事故の様子の説明を受け、爆発炎上した原子力発電所事故が周囲に与える影響の甚大さを痛感しました。

また、チェルノブイリ原子力発電所視察の帰りに、チェルニゴフ州立健康管理センターを訪問しましたが、訪問団一行がセンターに到着すると、オーロフィノスカヤ所長以下職員多数が玄関前で到着を待っていており、現地のテレビ局まで取材に来ていました。遠い日本で原子爆弾の被害を受けた長崎から医師団が、同じ放射線被ばく地である当地を訪問することに地元でも大きな関心を持っていることを実感しました。



チェルノブイリ原子力発電所内の資料展示室

今回初めて長崎・ヒバクシャ医療国際協力会の会長と副会長がウクライナを訪問し、現地の研究機関や政府機関等の責任者と大所高所からの意見を交換し、今後のナシムの活動の方向性について協議すると同時に、お互いの信頼関係を構築したことは、今後のナシムの活動にとって大きなメリットになることと考えられます。

チェルノブイリ・カザフスタン 関連医師研修

平成5年度から毎年実施しているチェルノブイリ・カザフスタン関連医師・専門家研修が、本年度も7月20日から8月21日まで、長崎大学医学部を中心に行われ、ベラルーシ共和国、カザフスタン共和国から各2名、ロシア連邦、ウクライナから各1名の計6名が参加しました。

研修はまずヒバクシャ医療の全体像を把握してもらうための「一般カリキュラム」を行った後に、各研修生の専門分野に即した「専門カリキュラム」を行いました。一般カリキュラムでは、放射線影響研究所や長崎市原爆被爆者健康管理センター、長崎原爆病院の視察をはじめ、恵の丘長崎原爆ホームの訪問、天草はまゆう療育園や玄海原子力発電所を見学した他、長崎大学の各関連教室で講義や実習を行いました。研修期間中1泊2日で訪れた熊本県天草のはまゆう療育園では、重症心身障害者に対するきめ細かな医療ケアを見学し、母国の現状を省みて大きな感銘を受けたようです。

専門カリキュラムでは、それぞれの専門分野にあわせ、疫学や病理学などについて長崎大学大学院医歯薬学総合研究科の各専門分野での研修を行いました。また8月9日の長崎原爆記念日には、平和祈念式典に参列して、長崎原爆で被害にあった多くの人々の冥福を祈りました。その前夜である8月8日には市民が平和の灯をともし、原爆の惨禍を忘れず、平和の尊さの意識を受け継ぐため平和公園で実施されている「平和の泉キャンドルライトアップ・ミニコンサート」に研修生として初めて参加し、カザフスタン共和国のダニエル・ムシノフ セミパラチンスク医科大学教授が研修生を代表して多くの参加者の前で追悼の辞を述べました。

研修生はいずれも、今後、ヒバクシャ医療あるいは放射線医療教育といった分野で各国において中心的役割を背負っていかれる方々ばかりです。将来の国際医療協力分野における良きカウンターパートになっていただけるものと思っています。ナシムでは今後とも長崎大学をはじめとした研修機関と協力しながら、本事業を継続し、発展させていきたいと考えています。



歓迎レセプション



伊藤長崎市長を表敬訪問

研修後の感想

People

◆マリーナ・コーノワ Marina Konova (ロシア連邦)

オブニンスク放射線医学研究所研究員 (分子病理学)

研修の前半に訪れた原爆資料館や平和公園などの原爆関連場所では大きな衝撃を受けるとともに、各種医療機関を訪問した際には国家がいかに原爆被爆者に対して労力や資金を割いているかを実感しました。原爆ホームでは職員の方たちの入居者に対する愛情と心遣いに感動を覚え、暖かい気持ちにさせられました。

◆イリーナ・ドミトレンコ Iryna Dmytrenko (ウクライナ)

放射線医学研究所研究員 (血液部門免疫遺伝学)

研修で強く印象に残ったのは重症心身障害児施設の訪問です。そこで働く職員たちの入所者に対する医療的支援や心配り、忍耐にはたいへん感動しました。私はキエフの職場で放射線被ばく者と非被ばく者の白血病発生に関する遺伝子破壊について研究しています。放射線誘因による癌発生の問題などで長崎大学原研の優れた専門家と意見交換したり、様々な学術的アプローチについて話し合ったりしたことはたいへん有意義でした。



財団法人 放射線影響研究所を視察

◆ワシーリ・ベリャコフスキ

Vasili Beliakouski (ベラルーシ共和国)

ゴメリ医科大学教授 (腫瘍学・放射線医学)

我々はよく、日本のことを「陽が昇る国」と言います。今回の滞在中、私は、太陽が単なる日本のシンボルではなく、苦痛を乗り越え、未曾有の悲劇から立ち直った日本人の精神的シンボルでもある、ということを感じました。このような機会を与えてくれたナシムには心より感謝しています。また長崎滞在中に出会った多くの人々にも感謝申し上げたいと思います。

◆セルゲイ・デニソフ Sergei Dzianisau (ベラルーシ共和国)

ベラルーシ医科大学副学長・教授 (解剖学)

研修で重要だったのは、長崎県知事や長崎市長、長崎大学学長及び医学部長、それにナシム会長といった方々への表敬訪問です。これらの訪問は我が国の問題に対して関心を持っていただく役割を果たしたと思っています。そのことは長崎の新聞やテレビが私たちに関心を示していた、ということからもわかります。研修のプログラムは私の学術的・教育的関心によくフィットしていましたし、教育カリキュラムの作成や医学教育制度の充実といった私の管理事務にもよく適合していました。

◆バヒトジャン・イサハノヴァ

Bakytzhan Issakhanova (カザフスタン共和国)

セミパラチンスク病理診断局主任 (病理学)

専門研修で非常に興味深い講義を聴き、その中で個別の病理的問題に対する新しい視点を知るとともに、最新のテクノロジーも知ることができました。日本は私たちが興味を持っているすべての事柄について快く情報を提供してください感謝しています。

原爆資料館や、死の床にありながらお未来の同僚たちのためにできる限りのことをしてくれた永井隆博士の勇気が非常に印象深かったです。



天草・はまゆう療育園を視察

◆ダニエル・ムシノフ Daniyal Mussinov (カザフスタン共和国)

セミパラチンスク医科大学教授 (腫瘍学)

私は、ソ連の核実験により40年以上にわたって放射線被ばくの影響を受け続けてきた人々が住むカザフスタン共和国セミパラチンスクの出身です。この地域では急速に腫瘍(がん)の頻度が増加しています。私は長崎の原爆被爆者に対して医療や福祉などでどのような援助がなされているかを知り、それはたいへん興味深いものでした。外科医である私のために多くの病院を見学させていただきましたが、実際に手術を見学させていたこともあり、たいへん有益なものでした。とても感謝しています。

“アンニョン ハシムニカ” 韓国医師等と被爆者医療で交流

ナシムでは、ヒパクシャ医療の研修と交流を目的として、平成7年度から韓国の医師や看護師等を長崎に招聘しておりますが、本年度も6月に医師2名、事務職員2名の計4名を招聘しました。大韓赤十字社職員以外にも、原爆被害者診療協定病院に指定されている釜山報勲病院から初めて医師1名を招聘しました。乳癌患者の乳房再建手術に関心を持っているソウル赤十字病院の白種大（ペク ジョンデ）外科専門医は、日赤長崎原爆病院で乳房の手術を視察し、たいへん興味深かったと感想を述べました。また人工透析室長をしている釜山報勲病院の韓環根（ハンギョングン）内科専門医は長崎市内で人工透析ベッド数の多い医院を視察し、医師と意見交換をして交流を深めました。韓国内の原爆被爆者に対する健康管理や福祉の増進事業を担当している大韓赤十字社特殊福祉事業所の張頌雅（チャンソンア）さんは長崎市役所の原爆被爆対策部で手帳交付事務の細かい説明を受け、韓国で原爆被爆者からの手帳交付申請に対する審査要領等を学びました。

またナシムでは、専門医師等派遣事業で9月6日～9日の4日間、長崎大学附属病院 小林初子副看護部長、日本赤十字社長崎原爆病院 江添郷子看護副部長、長崎市原爆被爆者健康管理センター 松尾恵美子中央検診所次長兼看護係長、NASHIM事務局 草場里見書記

の計4名を韓国へ派遣しました。韓国から被爆者医療の研修で大韓赤十字病院等の看護師を円滑に受け入れるにあたり、韓国の病院事業や看護体制を把握し、実際の看護現場の様子を把握しておくことはたいへん重要であり、今回の派遣となったものです。

大韓赤十字社の林光振（イムクワンジン）事務総長表敬訪問後、居昌赤十字病院、陝川原爆被害者福祉会館、統営赤十字病院を訪問し病院視察や看護事情についての意見交換を行いました。大韓赤十字病院はホームレスを含む最貧生活層の市民や外国人労働者に対して無料診療を行っているのが特徴ですが、まさに基本理念である人道や奉仕の精神を実践しているものといえるでしょう。病院を視察して気づいたことは、ナースステーション近くの白板に患者の氏名、年齢、病名、症状、手術名等のプライベートなことが病院訪問者からすぐ見られるような状態で掲載されていること、各病室に付き添い用の大きい冷蔵庫が1台ずつ置いてあること、ベッドの下に付き添い用の簡易ベッドが置かれてあることなどでした。また

看護師数が少ないので、勤務がたいへん忙しいということでした。

今回の病院視察や看護師との意見交換等を通じて韓国の看護師の置かれている環境や勤務状況がよく理解され、今後、より在韓被爆者のニーズに即した専門家研修を行うに当たって、非常に参考になりました。



長崎市原爆被爆者健康管理センターを視察



居昌赤十字病院を視察



統営赤十字病院を視察

2004年度・前期 韓国人医師等受入研修者名簿

研修期間	所属	職名	氏名	性別
5月30日～6月5日 (7日間)	大韓赤十字社ソウル赤十字病院	外科科長外科専門医	白種大 ペク・ジョンデ	男
	釜山報勲病院	内科科長内科専門医	韓環根 ハン・ギョングン	男
5月30日～6月3日 (5日間)	大韓赤十字社ソウル赤十字病院	医務課長	李相千 イ・サンチョン	男
	大韓赤十字社特殊福祉事業所	在韓被爆者担当	張頌雅 チョン・ソンア	女

2004年度・前期 専門医師等派遣事業・(韓国)派遣職員名簿

派遣期間	所属	職名	氏名
9月6日～9月9日 (4日間)	長崎大学医学部・歯学部附属病院	副看護部長	小林初子
	日本赤十字社長崎原爆病院	看護副部長	江副郷子
	長崎市原爆被爆者健康管理センター	中央検診所次長兼看護係長	松尾恵美子
	長崎県原爆被爆者対策課	係長(副参事)	草場里見

『放射線災害の緊急医療について考えよう』

ナシムでは、ヒバクシャ医療や放射線に対する正しい知識の普及のため、一般市民向けのシンポジウムや講演会、写真展等を毎年夏に開催しています。

近年、原子力関連施設の事故や国際紛争により、放射線災害に対する国民の不安が高まってきており、不測の際の放射線災害について日頃からよく対策を講じておく必要があります。そこで7月31日、『放射線災害の緊急医療について考えよう』と題して長崎大学大学院原爆後障害医療研究施設（原研）と共同で公開セミナーを、長崎原爆資料館で開催しました。

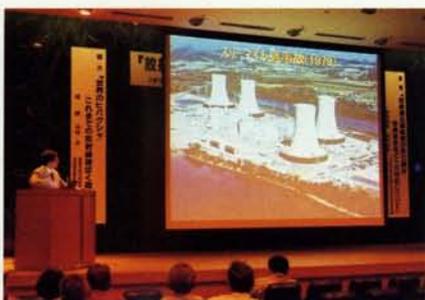
第一部の講演会では、財団法人原子力安全研究協会放射線災害医療研究所の衣笠達也副所長が「放射線災害医療の取り組み：原発事故などへの対応について」と題して講演を行いました。世界で起きた放射線災害の事例を紹介し、「放射線事故は思いがけない場所や状態から発生する。緊急医療体制は日頃から準備しなければ有効に機能しない」などと述べました。

次に、長崎大学大学院医歯薬学総合研究科の高村昇助教授が「世界のヒバクシャ：これまでの放射線

被ばく関連事故」という題で、世界でこれまで行われた核実験や発生した放射線事故について、隣接する国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館のデータベースをもとに、わかりやすく紹介していただきました。

第二部では、国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館の見学を、追悼祈念館職員が案内する形で行いました。平和情報コーナーでは、長崎大学の高村助教授と三根真理子助教授にパソコン画面で緊急放射線被ばくデータベースや放射能Q & Aなど被爆医療関連情報の説明をしていただきました。また、追悼空間では献花して被爆者の冥福を祈りました。

講演会后10日も経たない8月9日には、福井県の関西電力美浜原原子力発電所3号機で運転中に蒸気が噴出し、4人が死亡し7人が重軽傷を負うという痛ましい事故が発生しました。この事故は放射線漏れ事故ではなかったにせよ、事故に迅速に対応する緊急医療体制の整備の必要性を改めて痛感させられるものであり、緊急被ばく医療の重要性を再認識させられました。



衣笠達也 副所長が講演



国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館を見学



参加者が追悼空間で献花

来場者アンケート

ナシムの講演会はこれまでほぼ毎回参加していますが、今回は前回までと内容の変化があり、たいへん興味深く聞きました。被爆を学問的に理解し研究することの必要性を感じていますが、そこに世界のヒバクシャの苦しくてつらい思いを忘れないでほしいと思いました。

(40歳代 女性 公務員)

衣笠先生のご講演はたいへんわかりやすく理解を深めることができました。講演とは関係ありませんが、電離放射線健診を受けられる病院が少なく探すのにたいへん苦勞しました。医療関係者ではないのでそういう情報もホームページ等で紹介して頂けると助かります。

(30歳代 女性 会社員)

放射線が身近な生活の中でどのような形で利用されているのかがわかるような講演があればよいと思いました。

(20歳代 男性 会社員)

ブラジルにおける放射線源紛失事故の話が印象に残りました。このような形で被害が拡がるとは知りませんでした。

(20歳代 男性 学生)

東海村の臨界事故は未だにはっきり覚えていますが、放射線事故がこれほど多いとは思っていませんでした。

(30歳代 女性 学生)

放射線事故に対する長崎県内の医療体制はどのようになっているか疑問を持ちました。

(20歳未満 男性 学生)

ウクライナのグリシチェンコ外務大臣が長崎を訪問

6月9日、ウクライナからグリシチェンコ外務大臣が川口外務大臣との会談に先立ち長崎を訪れ、金子県知事や伊藤長崎市長を訪問し、さらにはナシムの井石会長や齋藤副会長等と懇談を行いました。グリシチェンコ外務大臣はチェルノブイリ原子力発電所事故との関係でウクライナに各種の医療支援を行っている被爆地長崎へ訪問したいと以前から希望しており、今回の訪日で実現した形となりました。県庁や長崎市役所では、金子知事や伊藤市長にウクライナ政府が今後も核軍縮に取り組んでいくと述べるとともに、知事、市長のウクライナ訪問を要請しました。また、ナシムの井石会長や齋藤副会長、長崎大学関係者、県、市の職員とも懇談を行い、チェルノブイリ原発事故後の医療支援に対してお礼を述べ、今後とも協力をお願いしたいとの発言がありました。



グリシチェンコ外務大臣と懇談

図 書 出 版

ナシムは諸外国での放射線関係事故に関する図書の邦訳出版や長崎原爆関係図書の英訳出版、ロシア語の医学教科書出版などを行っています。今年は次の図書を出版して、関係団体等に無償配布しています。

『白血病診断図譜詳解— —放射線関連白血病を含む—』

鎌田七男 広島大学名誉教授著

本著は、白血病の基礎から臨床までの幅広い分野について、最新の情報を網羅したカラーアトラス集です。かつて不治の病として恐れられ、原爆被爆者に多発した白血病の病態を究明すべく、細胞から染色体、そして遺伝子の異常に到るまでを克明に記載しています。特に放射線関連白血病に関する章は、長年直接原爆被爆者に関わってこられた鎌田先生ならではの貴重な資料が提示されています。今後英語版、ロシア語版等に翻訳することで、世界の医師・研究者に活用していただく予定です。



『白血病診断図譜詳解—放射線関連白血病を含む—』

『原爆被災復興日誌』英訳版

翻訳 郭 芳村
監修 柴田義貞 長崎大学教授

本著は、故・調来助長崎大学医学部名誉教授が、原爆が投下された直後からの被爆者の救護や大学再建の様態を克明に記述した「長崎医科大学原爆被災復興日誌」を英訳出版したもので、英文タイトルは「A Physician's Diary of the Atomic Bombing and its Aftermath」です。翻訳したのは米国メリーランド州在住の台湾出身医師の郭芳村さんで、郭さんの兄芳徹さんは、長崎医科大学に留学中、大学構内で爆死しました。芳村さんが1955年に台湾から米国へ渡る途中、お兄さんの埋葬場所を探そうと長崎に立ち寄った際、埋葬時の様子などを教えてくれたのが調来助教授（当時）でした。本著は220部を米国の大学図書館や研究者に贈った他、国内の大学図書館や県内図書館などにも寄贈しました。



『原爆被災復興日誌』英訳版の表紙